

過程で生じるイノチの忘却、「等身大」世界の切捨てという文明的な負の渦流を巻き返すことによって解き放ち、ひいては「自己喪失」から「自己

回復」へと進むことに目的がある。竹内の方法から発する問いは、実はまだ竹内自身によっても十分に試されておらず答えられていない。

- 1 Daniel Bell, *The End of Ideology: On the Exhaustion of Political Ideas in the Fifties*, Harvard University Press, 2000. Herbert Aptheker, *World of C. Wright Mills*, Periodical Service Co., 1976.
- 2 『思想』1956年11月号、「特集・大衆社会」。松下圭一『現代政治の条件』中央公論社、1959年。
- 3 松下圭一『現代日本の政治構成』東京大学出版会、1962年。清水幾太郎『無思想時代の思想』中央公論社、1975年。
- 4 石牟礼道子編『水俣病闘争 わが死民』創土社、2005年、35頁。旧版、現代評論社、1972年。
- 5 このような循環型生態系を室田武、多辺田政弘、植田敦はエントロピー派経済学の観点から「定常開放系」と呼んでいる。植田敦「物質循環による持続可能な社会」(室田・多辺田・植田『循環の経済学——持続可能な社会の条件』学陽書房、1995年)。
- 6 植田敦は石油エネルギーへの転換によって開始した化石燃料の加速度的な大量消費が、「定常開放系」の持続可能な循環を崩壊させてきたと断っている。植田敦『石油と原子力に未来はあるか 増補版—資源物理の考え方』亜紀書房、1987年。
- 7 石牟礼や竹内と同じ問題の地平から「歴史」を見た哲学者として、ここでは市井三郎を上げておく。市井は名著「歴史の進歩とは何か」岩波新書、1971年のなかで、物質的な「富裕」による発展が「歴史の進歩」を測る基準ではないとし、むしろ進歩の基準は「責任を問われることのない、言われなき苦痛」をどれだけ減らすことができたか、にこそ置かれるべきだとした。この苦痛を市井は「不条理の苦痛」とも呼んでいる。よりの確に言えば、この「不条理の苦痛」とは人間が自己のイノチの実存的な時間空間に制約される「等身大」の世界に置かれている、という理由だけで「苦痛」をこうむる場合を指している。たとえばこの時代にアフガニスタンのカンダハルに生を享けたという理由だけで、両親を失い、家族を失うような「苦痛」を身に蒙る少年は、この「不条理の苦痛」にさいなまれているのである。
- 8 坂口安吾「墮落論」『新潮』第43巻第4号、昭和21年。『坂口安吾全集』第14巻、ちくま文庫、1990年、521頁。
- 9 坂口安吾「大井広介という男」『現代文学』第5巻第8号、昭和17年。『坂口安吾全集』第14巻、前掲、405頁。
- 10 坂口安吾「巻頭随筆」『現代文学』第6巻第7号、昭和18年。『坂口安吾全集』第14巻、前掲、473-474頁。
- 11 「情欲論」『劉再復論文選』香港大地図書公司、1986年。劉再復は当時、中国社会科学院文学研究所の所長。
- 12 「文学主体性」『劉再復論文選』前掲。
- 13 1982年に中共中央によって始められた「社会主義精神文明の建設」という大キャンペーンは、当時の倫理道義の崩壊状況にたいする国家指導者のそうした危機感に発するものだった。
- 14 劉再復のこの議論は、1986年から87年にかけて、「劉再復現象」と呼ばれるほどのブームを呼ぶとともに、ブルジョア自由主義的主張として多くの批判が浴びせられた。そのした中で劉再復のこの論点を擁護し、その身柄を保護したのが現在の党主席胡锦涛(当時貴州省党委員会主席)だった。「專題：中共十六大」『星洲日報』国際版、2002年11月10日。
- 15 張寧「“竹内魯迅”的中国位置」(発言提綱)愛知大学21世紀COEプログラム国際中国学研究センター主催国際シンポジウム『日本・中国・世界——竹内好再考と方法論のパラダイム転換』2006年6月30日-7月1日。
- 16 菅孝行「抵抗のアジアは可能か——『魯迅精神』再審」国際シンポジウム『日本・中国・世界——竹内好再考と方法論のパラダイム転換』前掲。
- 17 竹内好「現代思想の動き第8回 アジアのナショナリズム」『朝日新聞』1955年8月25日付。「アジアのナショナリズム」『竹内好全集』第5巻、筑摩書房、1981年、8頁。
- 18 竹内好「日本・中国・革命」『講座中国』第1巻「革命と伝統」筑摩書房、1967年。同『竹内好全集』第4巻、筑摩書房、1980年、341頁。
- 19 もっとも早くこの中国の統一と近代化の関連の問題を取り上げたのは、矢内原忠雄、大上末広、尾崎秀実、中西功らによって展開された1930年代の「中国統一化論争」である。山口博一『地域研究論：地域研究シリーズ』第1巻、第4章 アジア経済研究出版会、1991年に詳しい。30年代の中国の国民国家形成について論じた近年の著作としては、

- 西村成雄「20世紀史からみた中国ナショナリズムの二重性」同編『現代中国の構造変動3 ナショナリズム——歴史からの接近』東京大学出版会、2000年。
- 20 こうした見解を戦後いち早く提起したのは中島太一である。中島太一『中国官僚資本主義研究序説——帝国主義下の半植民地的後進資本制の構造』滋賀大学経済学部叢書、1970年。近年のものとしては、久保亨「近代的国民経済の形成とナショナリズム」西村成雄編、前掲。
- 21 西村成雄、前掲論文。
- 22 Chalmers Johnson, *Peasant Nationalism and Communist Power: The Emergence of Revolutionary China, 1937–1945*, Stanford University Press, 1962.
- 23 Mark Selden, *The Yanan Way in Revolutionary China*, Harvard University Press, June, 1971. 邦訳、小林弘二・加々美光行共訳『延安革命——第三世界解放の原点』筑摩書房、1976年。
- 24 「三三制」とは、辺区参議会議員の構成を、共産党、その他政党、無党派民衆の三者でそれぞれ三分の一ずつとする比例配分方式を採る制度をいう。
- 25 穴戸寛「百団大戦の評価問題」(『中国研究月報』423号、1983年)。
- 26 竹内好「中国の近代と日本の近代——魯迅を手がかりとして」東京大学東洋文化研究所編『東洋文化講座』第3巻「東洋的社会倫理の性格」白晝書院、1948年。のち『竹内好全集』第4巻、前掲に「近代とは何か(日本と中国の場合)」と改題して収録、同134–135頁。
- 27 孫歌「竹内好における歴史哲学」国際シンポジウム『日本・中国・世界——竹内好再考と方法論のパラダイム転換』前掲。
- 28 鶴見和子・市井三郎編『思想の冒険——社会と変化の新しいパラダイム』筑摩書房、1974年。鶴見和子・川田侃編『内発的発展論』東京大学出版会、1989年。玉野井芳郎・鶴見和子・新崎盛暉共著『地域主義からの出発』学陽書房、1990年。
- 29 竹内自身は「オリエンタリズム」という用語は使っていない。ただ事実として次のような言い方は、竹内が「オリエンタリズム」の何たるかを熟知していたことを示している。いわく、「東洋の近代は、ヨーロッパの強制の結果である、あるいは、結果から導き出されたものである、ということは、一応は認めてかからねばならぬだろう。……東洋には、本来にはヨーロッパを理解する能力がないばかりでなく、東洋を理解する能力もない。東洋を理解し、東洋を実現したのは、ヨーロッパにおいてあるヨーロッパ的なものであった。……ヨーロッパがヨーロッパにおいて可能になるだけでなく、東洋もヨーロッパにおいて可能になる」『竹内好全集』第4巻、前掲、129頁、136–137頁。
- 30 『陳雲文選』第3巻、人民出版社、1995年、44頁。
- 31 1942年、43年の陝甘寧辺区の「大生産運動」の中で農民英雄として讃えられた呉満有も、実は流浪の果てに陝北の延安にたどり着いた「客民」だった。Selden, op. cit.
- 32 速水佑次郎・神門善久『新版 農業経済論』岩波書店、2002年。
- 33 毛沢東「論持久戦」『毛沢東選集』第2巻、人民出版社、1991年、448頁。
- 34 Andrew J. R. Mack, *Why Big Nations Lose Small Wars: The Politics of Asymmetric Conflict*, *World Politics*, Vol. 27, No. 2 (January 1975). このマックの議論は、現在の中東地域におけるアメリカの戦いが長期化と泥沼化を強いられる状況下に再評価されるようになっている。たとえば Ivan Arreguin-Toft, *How the Weak Win Wars: A Theory of Asymmetric Conflict*, Cambridge Studies in International Relations No. 99, Harvard University, Massachusetts, 2005.
- 35 永井陽之助『時間の政治学』中央公論社、1979年。
- 36 「情念国家」という用語法は、筆者が『資料・中国文化大革命』りくえつ、1980年の「あとがき」で最初に用いた。のち加々美光行『逆説としての中国革命——反近代精神の敗北』田畑書店、1986年の第1章「『国家的情念』論の欠落」でより詳細に論じた。
- 37 鶴見俊輔「国体について」『戦時期日本の精神史——1931～1945年』岩波現代文庫、2001年。
- 38 マックス・ウェーバーのカリスマ分析が官僚制分析と合わせて議論されるのもこのためである。そこでは「カリスマの日常化」によって、鶴見俊輔のいう「情念国家」の密教的部分が後退するとともに、「合理的官僚制」が現れると考えられている。
- 39 王小強「農業社会主義批判」『農業経済問題』1980年第2期。
- 40 吉田松陰「丙辰幽室文稿」に言う。「普天率土の民、皆天下を以て己が任と為し、死を尽くして以て天子に仕え、

- 貴賤尊卑を以って之が隔限を為さず、是れ則ち神州の道なり」。松陰が江戸幕藩体制の封建的身分制を打破して徹底した「一君万民」的な集権制を構築することこそ、維新革命を可能にし、ひいては強靱な外敵防衛を可能にすると考えていたことを示している。ただ丸山真男はこの松陰の論点を国民国家形成への合理的思考として評価し、そこに「情念国家」へと直結する「非合理性」が伏在することを見ていない。丸山真男『日本政治思想史研究』1952年初版、1995年第8刷、307頁。
- 41 吉本隆明「日本ファシストの原像」『吉本隆明全著作集』第13巻、昭和44年。
 - 42 石牟礼道子『苦海浄土』講談社、1969年。同『椿の海の記』朝日新聞社、1976年。
 - 43 『椿の海の記』前掲。
 - 44 足尾鋳毒事件については多くの研究書があるが、ここでは簡便なものとして、渡良瀬川研究会『田中正造と足尾鋳毒事件研究』随想舎、2003年をあげておく。
 - 45 徳田教之『毛沢東主義の政治力学』慶応通信、1977年。以下、毛沢東のカリスマ化の政治過程についての記述はこの徳田著に多くを負っている。
 - 46 劉少奇「清算党内孟什維主義思想」『劉少奇選集』上、人民出版社、2004年。
 - 47 国家広播電影電視総局「党的知識：紅色歌曲背景紹介之二〈東方紅〉」2006年。中国共産党新聞「紅色音楽經典之〈東方紅〉」『人民網』2006年。
 - 48 「三番目の兄」の意。
 - 49 吉本隆明「転向論」『吉本隆明全著作集』第13巻、前掲。
 - 50 G・オーウェル『1984年』。このような「監視社会」を社会主義社会一般に拡大してG・オーウェルの「1984年」になぞらえて見る向きもある。
 - 51 具体的には1958年1月8日公布の『中華人民強国戸籍登録条例』によって農村・都市住民の戸籍（戸口）の移動が厳しく制限されたうえ、戸籍移動のないまま、都市・農村間を一時的にもせよ空間移動することが許されなくなった。詳細は陸益龍『戸籍制度——控制与社会差別』商務印書館、2003年。前田比呂子「中華人民共和国における「戸口」管理制度と人口移動」『アジア経済』1993年2月号。
 - 52 文革期中国の文革支持派の議論では、レーニンの『国家と革命』やマルクスの『経済学批判』の中の過渡期論がしばしば引用され、共産主義に向けた社会主義過渡期には国家はなお必要悪として存続するが、最終的な過渡期の目標が国家の消滅にあることが主張された。加々美光行「哲学論争」野村浩一編『文化と革命』三一書房。
 - 53 そうした互助互酬の規範によるモデルとして、文化大革命の時期、全国的に賛美の対象となり宣伝された一例が「大寨式労働点数制」の「労働点数相互評価制」と言われるものにほかならない。李懐印「集体制時期中国農民の日常労働策略」『孤独書齋』2006年2月4日。
 - 54 小倉芳彦『逆流と順流——私の中国文化論』研文出版社、1978年。
 - 55 この大量餓死の実態は1982年の人口センサスによって、初めて公式に明らかになった。若林敬子『現代中国の人口問題と社会変動』新曜社、1996年、59-60頁。
 - 56 高継民「毛沢東請辞国家主席風波」（紀実版『党史文苑』2005年4月）。
 - 57 「三自一包」政策は、のち文化大革命が否定されて改革開放政策が採用された1979年当初に鄧小平が採用した国内改革政策とほぼ同一の内容を持つものだった。
 - 58 1979年に始まる鄧小平の「改革開放」政策と62年当時の調整政策は、「改革」推進という面では、内容的に極めて酷似していた。違いは調整政策には「対外開放」が伴っていなかった点にある。この相違は決して小さなものと見なすことはできない。というのは、1960年を境に国際社会は国連総会でのケネディ演説に始まる「開発の10年」に謳われたように、GATT、IMF、世界銀行などが中心となって、開発援助、第二世銀の設立、貿易、資本流通の面で第三世界に対する経済援助が大々的に展開されるようになっていたからである。
 - 59 竹内好「中国の近代と日本の近代」『日本とアジア』前掲、16-19頁。
 - 60 たとえば1972年1月号の『アジア経済』中国特集号の小島麗逸「中国に見る自然の回復——大躍進前期までの山区建設を中心に」は、大躍進・人民公社政策が持つ中国独自モデルとしての積極面を高く評価しつつ、その失敗については触れ得ていない。
 - 61 「農村社会主義教育運動中目前提出的一些問題」（略称、23条）1965年1月（『中華人民共和国国史全鑑』第3巻、團結出版社、1996年、3229頁）。
 - 62 菅孝行「抵抗のアジアは可能か——『魯迅精神』再審」国際シンポジウム『日本・中国・世界——竹内好再考と方

法論のパラダイム転換』前掲。

- 63 竹内好「日本・中国・革命」『竹内好全集』第4巻、筑摩書房、1980年、320-325頁。原典は、『講座中国』第1巻「革命と伝統」（竹内好・野村浩一編、筑摩書房、1967年）。
- 64 小島清「雁行形態論とプロダクトサイクル論——赤松経済学の一展開」（赤松要先生門下生編『学問遍路——赤松要先生追悼論集』世界経済研究協会、1975年、227-245頁。小島の理論はその師赤松要の理論を踏襲して提起されたものである。
- 65 松本健一「世界史の地殻変動と竹内好」国際シンポジウム『日本・中国・世界——竹内好再考と方法論のパラダイム転換』前掲。
- 66 歴史学研究会編『アジア現代史』第3巻「独立と革命の時代」青木書店、1981年。岩波講座『現代』第4巻「植民地の独立」岩波書店、1963年。
- 67 フランツ・ファノン著、鈴木・浦野共訳「地に呪われたる者」『フランツ・ファノン著作集』第3巻、みすず書房、1969年。
- 68 サミール・アミン著、野口・原田共訳『周辺資本主義構成体論（世界的規模における資本蓄積）』第2分冊、柘植書房、1979年。A・G・フランク著、大崎正治ほか訳『世界資本主義と低開発』柘植書房、1979年。
- 69 マルクーゼ著、榎田・中島・向來共訳『理性と革命——ヘーゲルと社会理論の興隆』岩波書店、1967年。W・ライヒ著、小野・藤沢共訳『セクシュアル・レボリューション——文化革命における性』現代思潮社、1970年。
- 70 竹内好「近代の超克」（『近代日本思想史講座』第7巻「近代化と伝統」筑摩書房、1959年）。同「方法としてのアジア」（武田清子編『思想史の対象と方法』創文社、1961年）。
- 71 上山春平編『照葉樹林文化——日本文化の深層』中公新書201、中央公論社、1969年。
- 72 青木保『日本文化論の変容——戦後日本の文化とアイデンティティ』中央公論社、1990年。とくに第7章「国際化のなかの日本文化論」。
- 73 竹内好「アジア主義の展望」（『現代日本思想大系』第9巻「アジア主義」解題、筑摩書房、1963年）。とくに「二、自称アジア主義の非思想性」。のち同『竹内好評論集』第3巻「日本とアジア」筑摩書房、1966年に収録。
- 74 1980年代末に中国に起きた同様の「自己喪失」過程について筆者は論じたことがある。加々美光行『『自己喪失』の彼方に——中国・改革派知識人の苦闘』（『世界』1989年4月号）。
- 75 1990年、日本は一人当たりGDPでアメリカを追い越した。（財国際貿易投資研究所『国際比較統計』2006年6月28日、IV-004表。